

日本女子大学日本文学科蔵『狐の草子』——注釈編——

石井倫子・伊達 舞・渡邊咲子
吉田怜世・大塚千聖・武居真穂
藤田百合子・三上真由

はじめに

一、注釈

本稿は、日本女子大学日本文学科蔵『狐の草子』（以下、「女子大本」）の輪読会の成果をもとに、その注釈を試みるものである。

〔凡例〕

輪読会における担当は次の通りである。

一、女子大本を底本とし、対校本として左記の諸本を用いた。

第一段・第二段 吉田
第三段・第五段 武居
第四段・第七段 藤田
第六段 大塚

・早稲田大学図書館蔵『狐草紙』（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）

・国立国会図書館蔵『きつねの草子』（国立国会図書館デジタルコレクション）

・石川透蔵『狐の草子』（室町物語影印叢刊52）

・大東急記念文庫蔵『狐の草紙』（『室町時代物語大成』第四）

これに加え本稿では、『狐の草子』諸本の問題について渡邊が整理し、三上が校正を担当、最終的に伊達が統括した。なお、図版・翻刻・校異に関しては、別稿「日本女子大学日本文学科蔵『狐の草子』——翻刻編——

（『国文目白』第五七号）を参照されたい。

て『美術研究』二六〇号、一九六九年）

一、女子大本に欠落している第一段・第二段の詞書のうち、諸本に現存する第二段については、室町物語影印叢刊の本文に基づき概要を追う。

一、【校訂本文】には読解の便宜上、次のような校訂を施した。

- 1 適宜改行を行い、句読点・濁点を付した。
 - 2 心中思惟や会話文には「」を付した。ただし、草子地との区別が曖昧な箇所に関しては、これを付さない。
 - 3 漢字体は、すべて常用のものを用いた。
 - 4 漢字の踊り字は「々」に統一し、仮名の踊り字「、」や「く」は開いた。
 - 5 対校本により校訂を施した箇所は、(校訂箇所)として示した。
- 一、関連する先行研究や参考文献に関しては注番号を付し、第七段の後にまとめて示した。
- 一、各段の終わりに輪読会における段の担当者を示した。なお、席上で出た意見については、とくに発言者を断らない。

【第一段】 ※女子大本・諸本ともに詞書が欠落。

【第一図】

画面右側に、屋内で文を読む僧形の男と縁側に座る女の絵が大きく描かれる。続く第二段の詞書から、女主人から僧都への文を侍女が持ってきた場面であることが推測される。中央から左側にかけては、薄や紅葉した樹木、落下した紅葉など秋の景物が続いている。

(吉田怜世)

【第二段】 ※女子大本のみ詞書欠落。

※詞書は室町物語影印叢刊の本文による。なお、そのままの意味の通らない箇所については諸本と比較の上、私に改めた。

【本文】

ひてうは文取りて帰りぬ。しばしありて、「この使ひに人をつけて、行く所を見入れておくべかりけるものを」と思ひたるところに、このひてう、急ぎて文とて又差し出したたり。僧都取りて見れば、

日頃申したくは候ひつれども、御心もいかかと慎ましくて打ち過ぎ候へども、思ひあまり、申し候ひつるに、御返事御嬉しくこそ候へ。

これには大人しやかなる人こそよく候へ。若き人は心多くて恥づかしく候。そなたにも御心寄せに候へばこそ、かやうに細々と承り候ふらむ。いつしかなるやうに候へども、今宵同じくは御物越しにて申し候はばや。それへ参りたく候へども、おほろけにては軽々しく歩きなどする身にて候はず。夜更け方に忍びて御渡り候へ。御共の人も難しく候へば、これに車も候。御迎へに参らせ候はん。

とぞ書きたりける。僧都いよいよ心憎く思ひ、「輿車も持ちたりけり。物見などもせんずる」といよいよ心地よくて返事をぞ書きたりける。

立ち返り、かやうに承り候ふこそ御嬉しく候へ。夜更くるほどに参り候べし。雨風吹き候ふとも、必ず必ず。

とぞ書きたりける。僧都、見目・事柄も、さすが若くより心色めきたる人にて、髪剃り、湯引き、眉の霜打ち払ひ、残る眉毛いと少なく、白々と打ち散りたり。心化粧して老の波の夜を待ち侍るに、二十日の月差し出るほどに、車の音して門を開け、先のひてう導して来たり。八葉の車のさる体なるに、飴なる牛かけて、二十ばかりなる童の清げなるが車やり入れたり。中間と思しくて直垂着たる男二、三人具したり。僧都車に乗りて、彼のひてうをも後に乗せてけり。

【私注】

○ひてう

女主人と僧都との間を取り持つ侍女。「ひてう」には「美女（びぢよ・びんぢよ）」の転じた侍女を示す普通名詞とする説と、侍女の呼称とする説の二説がある。後者に類似する例としては謡曲「土蜘蛛」に「こてう（胡蝶）」という名の侍女が登場する。本絵巻には後述のように謡曲との発想の近似も散見されることから、「ひてう（飛蝶）」のとき侍女の名であるか。

○僧都

僧綱のうち僧正に次ぐ第二等官。この僧都のモデルを南北朝期の真言律僧、文観房弘真とする指摘がある。↓【補注】

○いつしかなるやうに候へども

「いつしかなる」は早すぎ、尚早の意味。気が早いようではあるが今宵すぐにも逢いたい、と女主人の方から積極的に僧都を誘惑している。

○眉の霜打ち払ひ

眉毛に生えた白髪を抜くことを、霜を払うのに喩えていう。直前の「髪剃り、湯引き」とともに僧都が身なりを整える様子。前文に「見目・事柄も、さすが若くより心色めきたる人」とあることから、僧都が若い頃より色事に手慣れていることがわかる。老僧となつてなお逢瀬の支度に余念がない描写が、読者に生々しくも滑稽な姿を想像させる。

○心化粧

相手に好感を与えようと改まった気持ちになること。また異性を意識し、気持ちを整い容姿などに気をつけることをいう。（参考）「暮れぬれば、典薬助、いつしかと心げさうしありきて」（『落窪物語』巻第二）

○老の波の夜を待ち侍る

僧都が女主人からの迎えを待つ様子。「老の波」は、「老のなみよるを

もしらであすかがはあすのふちせをまつぞはかなき」（『実材母集』六九二・ふけ行く月をみて）などのように、波の縁語である「寄る」に「夜」を掛け、自身の老いを述懐したものが多く、ここでは老僧の顔の皺を連想させつつ「夜」を導く序詞として用いられている。逢瀬を心待ちにする老僧に雅な歌語を用いられることで滑稽さが増す。

○八葉の車のさる体なるに、……直垂着たる男二、三人具したり

「八葉の車」は網代車の一種で、網代の車箱の表面を青地に黄で八葉（八曜）の丸の文様を散らしたもので、幅広く用いられたが、時代が下ると摂政、関白、大臣など身分の高い貴族の乗用となった。「飴なる牛」は、飴色をした牛のことで、上等・高貴な牛として貴ばれた。「二十ばかりなる童」は牛飼童。「中間」は公家や武家、寺院などに仕えた従者。きれいな童や従者とともに高貴な車を寄越した女主人に対し、僧都だけでなく読者も期待を掻き立てられる。

【通釈】

ひてうは手紙を受け取って帰った。しばらくして、「この使いに人をつけて、行く所を見ておけばよかつたのに」と思っているところに、このひてうが、大急ぎで再び手紙を差し出した。僧都は取って見ると、

常日頃、お手紙を差し上げたくださいましたが、あなた様のお心もどうかと気恥ずかしくそのまま日々を過ごしましたが、胸一つにおさめきれず、手紙を差し上げましたところ、お返事大変嬉しく存じます。私には年長者である人の方が好ましいのでございます。若い人は気が多くて気遅れいたします。あなた様におかれましても私にご好意をお寄せになつていらつしやるからこそ、このように細々と

お手紙を頂戴いたしますのでしよう。尚早なようではございますが、今夜、同じことならば、物越しにでもお話ししたたく存じます。そちらへ参上いたしたく存じますが、並々のことでは軽率に外出などする身でもございませぬ。夜更けの頃に人目を避けてお越しください。お供の方も難しいようですので、こちらにお車もございませぬ。お迎えに参上させましょう。

と書いてあった。僧都は、ますます心が惹かれるように思つて、「興や車も持っていたことよ。物見などもするのだらう。」と、ますます気分がよくなつて返事を書いたのであった。

折り返し、このように拝見いたしますことこそ、本当に嬉しくございませぬ。夜が更ける場合に、参上いたしましよ。雨風が吹きましても、必ず必ず。

と書いたのだつた。僧都は、容貌・人柄も、なんといつても若い頃から好色な人なので、髪を剃り、湯を浴び、眉の白髪を抜き、残つた眉毛はとでも少なく、抜いた眉毛が白々と散らばっている。張り切つて、「老いの波の寄る」よろしく夜を待つておりますと、二十日の月が上りはじめる頃に、車の音がして門を開け、先ほどのひてうが牛車を道案内してきた。八葉の文様のついた車で立派な様子なのに、銚色の牛をつないで、二十歳くらいの牛飼童で小綺麗な者が車を押し入れた。中間と思われて、直垂を着た男を二、三人連れていた。僧都は車に乗つて、例のひてうをも後ろに乗せた。

〈第二図〉

僧都が湯浴みをする様子と、迎えを心待ちに外を眺める様子を異時同図法で描く。僧都の目線の先には、先導する侍女と、小綺麗な牛飼童を

はじめとした従者が立派な牛車を引いてやって来る様子が描かれる。その行き届いた様子からは、女主人の高貴さがうかがい知れる。また絵と絵の間にそれぞれ広く取られた間隔は、牛の歩みの遅さと、女主人との逢瀬にはやる僧都の心情を対比するかのようである。

絵柄に関して、女子大本にのみ牛車に梅の文様が、また女子大本と早稲田大学図書館蔵本のみ従者の着ている直衣に柄が施されている。

【補注】『狐の草子』の僧都と文観房弘真

『狐の草子』の僧都は、出家者という立場でありながら好色な性格が災いして狐に誑かされる愚僧として描かれる。内田啓一氏はこの『狐の草子』と構成や構図などがほぼ一致する『文観阿舍利絵巻』の存在から、僧都のモデルが文観房弘真であつた可能性を指摘している。^{注三}

文観房弘真（弘安元年（一二七八）～延文二年（一二五七））は、南朝の護持僧として後醍醐天皇に重用された真言律僧である。後醍醐天皇の親政下ではその厚い信任を背景に東寺長者となるなど栄華を極め、親政崩壊後も天皇とともに吉野に移り南朝恢弘に尽力した。邪教とされた立川流を修し、『太平記』では悪僧・破戒僧として描かれている。

内田氏は、本絵巻の僧都と文観に以下の共通点を挙げ、本絵巻が単なる異類譚・靈驗譚のお伽草子ではなく、南北朝期の歴史的背景をもつて成立したものであることを説く。

(1) 僧都と女主人との贈答歌で詠まれた「吉野山」は、後醍醐天皇が南朝を成立させた吉野を想起させる。

(2) 狐に誑かされた僧都を見つけた「近衛殿の侍」は、後醍醐天皇の信任により氏長者・関白となつた近衛経忠・経家を想起させる。

(3) 狐から僧都を救った(狐が作り上げた世界を破った)「地藏」

は、足利尊氏が信仰したことでも知られており、後醍醐天皇の親政から足利武家政権に移行させた足利尊氏の隠喩と読める。

(4) 僧都が狐の邸で過ごしたとされる「七年」は、文観が後醍醐天皇の親政下で寵用され栄華を極めた、足かけ七年と重なる。

ただし内田氏が指摘するのは、実在の人物としての文観ではなく、後世のイメージに基づいた文観像の撰取である。狐と僧都という取り合わせについても、文観が狐と結びつきの深いダキニ天法を修したとして高山山衆徒から批判されていたことを挙げ、その文観が逆に狐に化かされたというところに面白みがあったと述べる。本絵巻の僧都のモデルを文観と想定した場合、現存諸本のすべてが第一段を欠くことについても、内田氏の推測通り、明らかに文観と判明する段であり、文観の名が付された聖教や美術作が焼かれたり墨消されたりしたことと同様に、意図的に破棄されたものとして得心がいく。

もともと女子大本は狐に化かされた僧都への嘲笑の視線が付加されるなど、『狐の草子』諸本のなかでもより滑稽譚の要素が強まった性格が見られており、内田氏が述べるところの、時代の流れとともに成立当初の意図が薄れ、単なる異類譚・霊験譚として伝来されていった後の写しと考えられる。

(吉田怜世)

第三段

【校訂本文】

今は十町ばかりも行きぬらんと思ふうちに、薄檜皮なる棟門を並べたる館の内へさし入れたり。これは秋の半ばなれば、庭には何となき草花

咲き乱れ、風になびく。空薫の匂ひ、さも気高く、いとど心もいさぎよし。車さし入れば、女郎花の生絹の袴着たる女房のおとなしやかなるが出でて内へ導く。空薫みちみちてよろづ心あるさまなり。一間なる所に、琴・琵琶立てて、几帳にはあらで引物したる内にありける人を見れば、そのさまあてやかに、楊貴妃・李夫人の装ひもこれには過ぎじとぞ覚ゆ。僧都のそばに居たり。いかになることぞとあまりのことに胸うち騒ぎ、わなわなと震はれたり。言ふ言の葉もゆかしきさまなり。こはいかに、これほどの人なき心地せられて、とかくためらひ、しばし物語などして居たるも心もとなく、とく寝ばやと思ひ、恥づかしながらとりあへず、

我がためにありけるものを吉野山人に知られぬ花の住み家はと音信おとづれければ、何となきやうにて、

枝ならぬ身なれば風も知らぬにや花の住み家と君は言へども

と詠じければ、僧都いよいよ感に堪へ、夜更くるも知らず遊び居り、やうやう明け方にまどろみてけり。

(校訂箇所) 女郎花の生絹の袴着たる女房みちみちて↓女郎花の生絹の袴着たる女房のおとなしやかなるが出でて内へ導く。空薫みちみちて

【私注】

○薄檜皮なる棟門を並べたる館

棟門は、左右二本の柱に切妻破風造りの屋根を備えた立派な門。「むねかとのゆへくしきがみゆれば、堂などにやと思ひてたち入たるに」(『とはずがたり』巻四)とあるように、寺院や公卿など高い身分

の貴族の邸宅に設けられた。ただし、棟門を「並べたる」とする底本の表現はやや不審。

○これは秋の半ばなれば、……よろづ心あるさまなり

女主人の邸の「よろづ心あるさま」を僧の視点から描写する。対校本との異文が集中する箇所であるが、①庭に草花が咲き乱れている点、②空薫の匂いがする点、③出迎える女房が季節感のある装いをしている点など、大凡の内容は共通している。ただし、「女郎花の生絹の着たる女房みちみちて」とある箇所は、対校本で「をみなへしのす、しのはかまきたる女はうのおとなしやかなるかいて、うちへみちひくそらたきみちく／＼て」となっており、意味が異なる。この点、底本の文意がやや不明瞭であること、絵では対校諸本と同様に女房が一人しか描かれていないことから、対校諸本に倣い校訂した。秋の草花が咲いている所に香が匂う情景は、そこに住む女が情趣を解する人物であることを予感させる。(参考)「御前の前裁心にまかせて高く生ひ茂るを、露は月の光に照らされてきらめきわたり……薫物の香、いとかうばしく匂ひ出でたりけるだに、今まで御格子も参らで月など御覧じけるにやと、あさましくめでたくおほえけるに、奥深く、箏の琴を平調に調べられたる声、ほのかに聞こえたりける」(『無名草子』)

○女郎花の生絹の袴着たる女房

「女郎花」は秋に着用する襲の色目の名。和歌では「女郎花色にもあるかな松虫を本に宿して誰を待つらん」(『後撰和歌集』巻第六・秋歌中・三四六・題しらず・よみ人しらず)のように女性と結びつけられ、僧都を邸へ誘う女房のイメージに合致する。「生絹」は生糸で織った布を打って柔らかくしたもので、上臈女房にふさわしい服装。(参考)「女郎花の単衣襲に、袖に秋の野を縫ひて露置きたる赤色の唐衣

重ねて、生絹の小袖、袴など、いろいろに雪の曙の賜びたるぞ、いつよりもうれしかりし」(『とはすがたり』巻二)

○引き物

布を引いて仕切り、隔てとする物。帳など。(参考)「引物もおろしてけるにや、障子の奥に寝たるそばに、馴れがほに寝たる人あり」(『とはすがたり』巻一)。なお第三図には引き物は見られず、屏風と襖が描かれている。

○楊貴妃・李夫人の装ひ

女性を美人に喩える常套句。(参考)「やうきひの、ゑむしよくを、あさけり……りふじんの姿。れうかくの間にへむす」(『たまものさうし』)

○いかなることぞ

対校諸本「いかにある事ぞ」。「いかなることぞ」の意とした。

○恥づかしながらとりあへず

対校諸本になし。底本の欠落箇所にあたる第一段で描かれる色好みの僧都像を受け、女主人に対し気後れしつつも当意即妙な歌を詠んだ僧都の様子が付け足されている。

○我がためにありけるものを吉野山人に知られぬ花の住み家は

本歌は「我がためにありけるものを下野や室の八鳥にたへぬ思ひは」(『平治物語』巻中・藤原成憲)。「吉野山」は平安時代以後から、「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ」(『古今和歌集』巻第一八・雑歌下・九五〇・題しらず・よみ人しらず)などのように隠棲の地であったが、平安時代後期から「はな桜さかりになればよしのやま春はたえせず嶺のしらくも」(『風情集』・一・桜・藤原公重)のように桜の名所とされた。「花の住み家」の典拠には、「うぐひ

すの木伝ふ枝を尋ぬとて花の住み処をきて見しはや」(『元良親王集』・一二一・御匣殿に、宮)が挙げられる。『元良親王集』の「花」は梅、「花の住み処」は御匣殿の家を指す。当該歌では「花」が吉野の桜に詠みかえられ、「花の住み家」は女主人の邸を意味する。

○枝ならぬ身なれば風も知らぬにや花の住み家と君は言へども

「風」は「ふく風に枝もむなしくなりゆけばおつるはなこそまれにみえけれ」(『千里集』・三一・枝空華落稀)など、「枝」に吹きかけて「花」を散らすものとして詠まれる。そのため、散らずにいる花は、「風に知られぬ」とされた。類歌に「やえがすみ世をへだてたる住み処にぞ風に知られぬ花はありける」(『唯心房集』・二四・春のうたのなかに・寂然)がある。女の返歌は、このような「桜」「風」の和歌の伝統的な発想の上で、「花の住み家」とあなたは仰るけれど、私の身は桜の花の枝ではないから風に気付かれないのでしょうかと切り返したものである。

○感に堪へ

「感に堪えない」に同じ。深く感動せずにはいられない。(参考)「忠節の志、もつとも感にたへたり」(『十訓抄』)

【通釈】

僧都が今は十町ほど行っただろうと思ううちに、従者は車を薄檜皮の棟門を並べている館の中へ入れた。今は秋の半ばであるので、庭には取り立ててこれというわけではないけれども様々な草花が咲き乱れ、風になびく。どこからともなく匂ってくる香が、いかにも気品があり、ますます情趣も清らかである。車をさし入れると、女郎花の色目の生絹の袴を着ていて大人びている女房が外に出て、邸の内へ導く。空薫の香が充

満して、何につけても風情ある様子である。一つの部屋に琴・琵琶を立てて、几帳ではなくて引き物をしている中に居た人を見ると、その容姿は上品で美しく、楊貴妃・李夫人の装いもこれには及ぶまいと思われる。女主人は僧都のそばに座った。どうしたことかと、あまりのことに胸が騒ぎ、がたがたと震えた。話す言葉もいつまでも聞いていたいような女主人の様子である。これはどうしたことが、これほどの人はいないという気持ちで、あれこれと迷い、しばらく話などをしていて落ち着かず、早く寝たいと思ひ、気後れしながら他のことは差し置いて、私のためにあったのだなあ。他の人に知られていない吉野山の花のようあなたな住み家は。

と詠みかけたので、女主人はこれといったこともない様子で、

私の身は枝ではないので風も気付かないのでしょうか。花の住み家なんてあなたは言うけれども。

と詠じたので僧都はいよいよ深く感動し、夜が更けるのも知らずに詩歌管弦の遊びを続け、ようやく明け方にとうとうと寝入ってしまった。

〈第三回〉

女主人の邸への到着場面と、部屋で僧都と女主人が対面し語らう場面とが異時同図で描かれる。棟門から入った牛車が進んでゆくと、縁側では女房が牛車の中の僧都に向かって手招きをしている。牛車は本来後部から乗車し前部から降車するものであるが、ここでは乗車口である後部から僧都が降りたように描かれている。^(注四)邸内には琵琶・琴のほか朱色で雁の群れを描いた屏風も立てられおり、こうした点にも女主人の邸の情趣深さがうかがえる。そのひとつ奥の部屋では僧都と女主人が対面している。殿油が描かれていることから、夜であることがわかる。第二段の

詞書で女主人は「御物越しにても」と誘っているが、帳など二人を隔てるものではなく、距離の近さを思わせる。

なお、第二図では青色であった牛車の車輪の横の紐がここでは黄色になつており、絵には不徹底さがうかがえる。また女子大本と早大本にのみ、襖や屏風の図様が詳細に描かれている。

(武居真穂)

第四段

【校訂本文】

さて、僧都は日たくるほどに起きぬれば、御手水たてまつり、やがて供御をぞ参らせける。魚色々整へ据えければ、僧都見て、「かかる法師の身なれば、魚鳥食ふこと、ゆめゆめなし」と言ひければ、程なく精進のものをしたためて参らせたり。宮仕の人々、いづれも目安きさまなり。僧都思ひけるは、かやうにきらきらしき人にも目馴れず。空恥づかしく食事もしかしか食はず。足元もたどたどしく、生強ひに身をつくるひぬれば、夜もうちとけて寝られず。目馴れぬことも多く、いとど心も恥づかしや。侍の方を見れば、男ども七、八人、女房どもあまたあり。酒飲み、歌ひ、遊び、物品々、まことにしる所あまたあるにこそ。まことに乏しからで、かくしつ々年月をぞ送りける。

(校訂箇所) 暫↓やがて、かくしつ↓かくしつ

【私注】

○日たくるほどに起きぬれば

男女の逢瀬の翌朝、男は夜明け前には女の家から帰るのが通常であ

り、僧都の思い入れの深さがうかがえる。(参考)「とみに起きたまはず、日たくるまで御殿籠り過ごしたれば」(『夜の寝覚』巻二)

○御手水たてまつり、やがて供御をぞ参らせける

御手水をご用意させ、すぐにお食事を差し上げた、の意。僧都に対して天皇や上皇の食事に用いられる「供御」という表現がとられていることに注目したい。後述の「侍の方」とともに宮中を想起させる表現である。(参考)「御手水、御粥などこなたにまゐる。日高う寝起きたまひて」(『源氏物語』若紫)

○かかる法師の身なれば

対校諸本では、「かかるふしきの身なれとも」。底本でのみ、女主人と関係を持ち不邪淫戒を破つたことに言及していないことになる。

○魚鳥食ふこと、ゆめゆめなし

動物や魚の肉を食べることは不殺生戒に値する。

○思ひけるは

対校諸本には見られない表現。以下、「まことにしる所あまたあるにこそ」まで僧都の心内語となるか。

○食事もしかしか食はず

対校諸本「食事も食はず」。「しかしか」は中世期には具体的な内容を省略する際に用いられることがほとんどであったが、時代が下るに従い、「終にしかしかとねむることなければ」(『中華若木詩抄』上)のように下に打消の言葉を伴って「物事がしつかり行われぬ」という意味にも用いられた。ここでも直後に「食はず」と打消の語があることから、「食事もしつかりと摂ることができない」の意。きらびやかで美しい女主人や宮仕えに気後れして食事も喉を通らない様子を表す。

○生強ひに身をつくろひぬれば

無理をして他人によく思われるように体裁をとりなす。(参考)「もの思ふと人に見えじと生強ひに常の面ありそかねつる」(『万葉集』巻四・六一三・山口女王)

○侍の方

貴族の宮仕たちが詰めている場所。先述の「御手水」「供御」とともに宮中を想起させる描写である。

○物品々、まことにしる所あまたある

「しる所」は莊園、領地。底本のみ「物品々」と、様々な物がたくさんあることに言及されており、裕福である様子がより強調されていると言える。

【通釈】

さて、僧都は日が高くなる頃に起きたので、宮仕が御手水をご用意し、すぐにお食事を差し上げた。魚を様々に用意して置いたので、僧都は見て、「このような法師の身なので、魚や鳥を食べることは決してない」と言ったので、程なく精進のものを用意して差し上げた。宮仕の人々は、どの人も見苦しくなく、感じがよい様子である。僧都が思うには、このようなきらびやかで美しい人にも見慣れない。なにとはなく恥ずかしく、食事もしっかりと食べられない。足元もたとどしく、無理によく思われようととりつくるっていたので、夜も落ち着いて寝られない。見慣れないことが多く、とても気が引けることだ。侍者の控室を見ると、男たちが七、八人、女房たちがたくさんいる。酒を飲み、歌い、遊び、色々な物、領地が実にたくさんあるに違いない。実に豊かで、このようにしながら年月を送った。

〔第四回〕

僧都と女主人が食事をする様子と、横で給仕をする女房が描かれる。飯が高く盛られ、僧都をもてなしていることがわかる。^(注五) 続きの部屋では男女が宴を開いている。「侍の方」にいる男や女房たちであろう。なお、囲碁に興じる者も描かれるが、女子大本と早稲田大学図書館蔵本のみ盤上の碁が省略される。ここでも透垣の奥に薄が描かれている。(藤田百合子)

第五段

【校訂本文】

かかりけるところに、僧都思ふことなく、女房とたはむれ遊び居たるところに、門のあたりに人音あまた聞こゆる。見やりければ、若き僧の錫杖を持ちたるが二、三人走り入りたり。これを見、そばなる女房をはじめ、数多くありつる者ども、これはこれとはばかりにて、我先にと逃げ走る。僧都は肝を消し、逃ぐる人々を見れば、老ひたるも若きも、幾年月の頃を経たる、毛もなき狐になりて、皆四方へ逃げ、影も形もなかりけり。

【私注】

○錫杖

杖の一種。上部のわくに数個の輪が掛けてあり、振ると鳴るので、道を行くときや乞食のときに用いられる。宝珠とともに、地藏菩薩の持物とされる。(参考)「小僧一人忽然として来り玉いしが、手に執錫杖、一卷の書を捧げ」(『地藏靈驗記』上・八)

○肝を消し

対校諸本「あさまし」。僧都の驚きをより強調する表現になっている。○幾年月の頃を経たる、毛もなき狐になりて

対校諸本になし。「毛も無ク老タリケル狐ノ椀ノ枝ヲ一ツ昨ヘタリケルガ」(『今昔物語集』巻第二十七・狐、大楹ノ木ニ変ジテ射殺サルル語第三十七)、「大キナル野猪ノ毛も無キニ抱付テ」(同・巻第二十七・光有リテ死人ノ傍ニ来タル野猪、殺サルル語第三十五)。劫を経て毛が抜け落ちた古狐の意か。

【通釈】

そうこうしているうちに、僧都が何の物思いもなく、女房と戯れ遊んでいるところに、門のあたりに人が来る音が激しく聞こえる。そちらのほうを見やつたところ、若い錫杖を持っている僧が二、三人走って入ってきた。これを見て、そばにいる女房をはじめ、たくさんのそこに居た者たちは、これはこれと言うばかりで、我先にと逃げ走る。僧都はひどく驚いて、逃げる人々を見ると、老いた者も若い者も、長い年月を生きてきた、毛もない狐になって、皆四方に逃げて、跡形もなくなつてしまったのだった。

〈第五図〉

右端には僧都と女主人が邸の外を見やつている姿が描かれる。突然の僧たちの来訪に驚いている様子であろう、早大本にのみ、二人の視線の先に錫杖を持った僧が二人描かれる。僧都の隣に座る女主人の足が獣らしく変化しており、狐になりかけている。

部屋の内には、逃げ回る狐が四匹。一匹は後足と尾しか見えないが、残りの三匹は頭に鬮髷や毛髪を乗せ、身体に反古を巻き付けている。こ

の反古には罽線が引かれていることから経文であることがわかる。小松和彦氏はこれらが紐でくくりつけられていることに着眼し、中国の伝承にみられる変化の修練を十分に積んでいない、未熟な狐である可能性を指摘している。^(注六)ただし、女子大本の「幾年月の頃を経たる、毛もなき狐になりて」という詞書は、力を持った古狐であることを示すものである。

(武居真穂)

第六段

【校訂本文】

さて、僧都は呆然として一人ぞ居にける。こは夢か現か、さても我が身は寝たりや寝ずやなどと思ひ、家の内を見まはせば、金剛勝院の大床の下なり。御簾や畳と思ひしは筵・菰切れなり。琵琶・琴と見へしは馬牛の骨、半挿・盃・色々の家具と見へつるは朽ちたる壺の割れ・皿の欠け・されかうべなり。僧都きはめて臆病なる者にて、こはいかなることぞと手足もはたらかず、身もすくみて、あきれはててぞ居たりける。色々美しき物着たると思ひしは反古・古き草子のはし取り集めたるにぞありける。

さてしもあるべきことならねば、高這ひに這ひ出で、やうやうとして南の大門へ出でけり。小童どもこれを見て、手を叩き足を空にして笑ひののしることかぎりなし。かかるところに近衛殿の侍、物へ参りけるが、金剛勝院に童ども集まり、物笑ひしけるを何ごとと思ひて立ち寄り見れば、年頃相知れる僧都の御坊なり。姿目もあてられず、こはいかなることぞと問ひければ、朦々として言ひ分くることなし。あさましき姿を見かね、我が着たる直垂の上を脱ぎて着せ、紙切れは脱がせ行き過ぎぬ。

僧都は故郷へ帰るに、この僧都きはめて背高かりけるに、直垂の上ばかり着ければ脛高く、をかききことかぎりなし。

※（第六回（前半））

僧都はあまたの童どもに囃し立てられ、なほなほ心もとほとほと、踏む足元も見え分かず、ここかしこに行き、かかりければ童はなほも喜び、手拍子打ちてはやしてけり。やうやうとして故郷の近所へ行き着きけり。

（校訂箇所）寝たる↓寝たり、初参しける↓物へ参りける、わきたかく↓脛高く

【私注】

○さて、僧都は杲然として一人ぞ居にける

底本のみ「杲然として一人ぞ居にける」とあり、対校諸本よりも僧都が置かれている状況を詳しく説明している。

○金剛勝院

「こんかうしやう院」の「しやう」には「聖」や「性」の字が想定されるが、ここでは宮次男氏が指摘するように、美福門院（鳥羽院皇后得子）開創の寺「金剛勝院」と考えたい。金剛勝院は、青蓮院（現京都府東山区）の前身の寺で、最勝金剛院とも言った。『本朝世紀』康治二年（一一四三）八月六日条には皇后藤原得子が御願の金剛勝院の落慶供養を行ったとある。具体的な地名が明記され、僧都が置かれていた本当の状況が明かされるといふ意味で重要な箇所である。また、

狐の鳴き声は「コウコウと鳴キテ逃去ニケリ」（『今昔物語集』巻第二十七・第三十九）「夜ならばこうこうとこそなくべきにあさまにはしる昼狐かな」（『曾我物語』巻五）と表現された。「こうこう—こんかう」と音通となつていふところにも面白みがある。

○大床

広廂のことで建物の縁。中世神社建築で用いられた語。「大床の辺より、世におそろしげなる白髪のうばまいたりけり」（『古今著聞集』十六第五二三話）のように、怪異出現の場となることも多い。

○半挿・盥

半挿は、湯水を入れる差し口付きの器。「御方には、いづくに半挿、盥かあらむ」（『落窪物語』巻一）「大事の半挿盥にて足洗えば」（『文正草子』）のように、盥とともに顔や手足を洗い清めるのに用いられた。僧都が思い起こしているのは女主人との朝に使用した半挿や盥であらう。

○家具

底本のみ「やく」。対校諸本では「調度」とある箇所なので、「夜具」より「家具」が妥当か。

○皿の欠け・されかうべ

大東急文庫本「あわひのから」、他四本「されかうべ」。菰切れ・馬牛の骨・半挿盥・壺の割れ・皿の欠け・髑髏などの列挙には、付喪神的なイメージが重ねられているか。

○高這ひ

腰を高くした四つんばい。『今昔物語集』巻第十六・備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七に「前ナル蔵ノ下ヨリ、怪ク黒キ者ノ猿ノ様ナルガ、高這ヲシテ這出デテ来タレバ」と、観音の靈験により救出さ

れた良藤が蔵の下から高這いになって出てくる描写が存在する。

○足を空にして笑ひののしる

ひっくり返って大声で笑い騒ぐ。(参考)「手を張り、足を空にしつ、悶え苦しむ七顛八倒」(『近世説美少年録』巻一)

○近衛殿の侍

近衛殿に仕える侍の意。近衛家は五摂家のひとつであり、そこに仕える侍が僧都を「年頃相知れる僧都の御坊」といつていることは、本絵巻の僧都が上流貴族とも深い交流がある人物であることを思わせる。

○物へ参りける

底本のみ「初参しける」。「初参」は、主従関係を結ぶ際に臣下が主人の元へ初めて参るという意味であるため、ここは対校諸本に従う。

○あさましき姿を見かね

対校諸本になし。底本のみ近衛殿の侍が僧都に直垂の上を貸した理由が書かれている。

○脛高く

衣が短くて、すねの上まで露出しているさま。身分の低い者がする格好であり、僧都がこのような格好をしていることに滑稽さがある。

(参考)「烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかかげて」(『徒然草』一七五段)

○僧都はあまたの童どもに……行き着きけり

底本にのみ見られる記述。なお、絵に關しては対校諸本と共通しており、絵第六図を分断する形でこの詞書が挿入されている。

【通釈】

さて、僧都は呆然として一人で座り込んでいた。これは夢か現実か、

それにしても自分は寝ていたのか寝ていないのかなどと思い、家の中を見回すと、女主人の邸だと思っていたそこは金剛勝院の大床の下である。御簾や畳だと思っていたものは敷物の切れ端である。琵琶・琴と見えていたものは馬や牛の骨で、半挿し・盥・様々な家具と見えていたものは朽ちた壺が割れた欠片・皿の欠片・髑髏である。僧都はたいそう臆病者なので、これはどういうことかと手足も動かさず、身もすくんですっかり途方に暮れてその場にしゃがんだままだったのだ。色とりどりで美しい物を着ていると思ったのは、書き損じ紙・古い書物の切れ端を取り集めたものであったのだ。

そのままでもいいわけではないので、高這いで外に這い出て、どうにかこうにかして南の大門へ出て行った。子どもたちは僧都の姿を見て、手を叩きひっくり返って大声で笑い騒ぐことこの上ない。そのようなところに、物参りしてきた近衛殿の侍が、金剛勝院に子どもたちが集まり、嘲り笑いをしていたのを何ごとかと思って立ち寄って見ると、笑われていたのは長年の間、互いに見知っている僧都の御坊である。その姿があまりにも酷く見ていられず、「これは一体どういうことですか」と問いかけたところ、僧都はぼんやりとしていてはつきりと答えることもない。近衛殿の侍は僧都の見苦しい姿を見かね、自分が着ている直垂の上を脱いで着せ、それまで纏っていた紙切れは脱がせて通り過ぎていった。

僧都は故郷に向かうも、この僧都は非常に背が高かったのに、直垂の上だけを着たため、丈が短くすねの上まで露出した状態で、おかしいことかぎりない。

道中、僧都はたくさん子どもたちに囃し立てられて、いよいよ心もしよんぼりと、歩く自分の足元もよくわからず、あちらこちらに行き、

このような様子であったので子どもは一層喜び、手拍子を打って囃し立てたのだった。僧都はやつとのもことで故郷の近くまで到着した。

〔第六図（前半・後半）〕

前半には僧都が反古を身に纏い大床の下に座り込んだ様子、床下から高這いで這い出す様子、南の大門を出て童たちや近衛殿の侍に囲まれる様子が、後半には子どもたちに指をさされて笑われる脛高姿の僧都の様子が異時同図法で描かれる。前半の床下に座り込む僧都の周囲には、第五図で狐たちが纏っていた人間の髑髏の体の骨、毛髪、また欠けた皿などが落ちており、ここが女主人の邸と同一の空間であることをうかがわせる。僧都が纏っている着物も、狐同様、経文の反古である。また、門を出た先に描かれる僧都の顎には底本でのみ髭が生えている。門は異界との境界と考えられていたことから僧都が現実に戻ってきた場面といえるが、後半部では既に見られず、髭が描かれたこととの直接的な関係は不明である。

なお、ここでも女子大本と早大本にのみ童たちの衣に柄が描かれる。

（大塚千聖）

第七段

〔校訂本文〕

さて、故郷へ行ければ、娘見つけて、嬉しながら僧都の姿を見るに、あさましさかぎりなし。そのまま我が着たりける小袖を脱ぎて着せにけり。事の有様を問へば、しかじかの由物語ぞしける。昔も今も地藏の御本誓、有難くこそ覚えけれ。七年のうちの楽しみは七日がうちにぞあるける。

（校訂箇所） 覚えける↓覚えけれ

〔私注〕

○地藏の御本誓

地藏菩薩は、釈迦入滅後から弥勒が世に現れるまでの無仏の間、六道及び五濁悪世の衆生を導くことを誓願とした菩薩。錫杖と宝珠を持つとする場合が多い。結末で地藏の霊験が語られることから、第四段で登場した錫杖を持った若い僧が地藏の化身であったことがわかる。なお、本絵巻では当該箇所前に「地藏」という言葉は見られない。巻頭の欠落部分に、僧都（あるいは娘）が日頃地藏を信仰していた記述などがあったか。

○七年のうちの楽しみは七日がうちにぞありける

僧都が狐の邸に滞在していたと思つた七年が、実は七日の間の出来事であったという結末が明らかとなる。

〔通釈〕

さて、僧都が故郷へ行くと、娘は父を見つけて、喜ばしくはあるもののその姿を見ると、見苦しいこと甚だしい。そのまま自分が着ていた小袖を脱いで着せたのだった。事の次第を問うと、これこれの訳を物語つた。昔も今も地藏の御本誓は、実にありがたく思わされるものよ。七年の間の楽しみは、たった七日の間の出来事であった。

〔第七図〕

僧都と娘が語らう様子が描かれる。娘は袖を目に当て涙を流している。そばの屏風に描かれているのは薄であるうか、諸本では山水図であ

る。

全体的に、女子大本と早大本は、程度の差はあれど、背景として物語の世界観を表す自然描写が簡略化され、その代わりに襖や屏風、或いは衣など、登場人物の身边を詳細に描写している。

【補注】室町期における地蔵信仰の流行と『狐の草子』

『狐の草子』の類話として、賀陽良藤が狐に誑かされる話がある（後述）。ただし、この話の主人公・良藤の救済は観音菩薩によってなされており、地蔵菩薩によって僧都が救われる『狐の草子』とはこの点が大きく異なる。

この改変について、大坪俊介氏は大和長谷寺の十一面観音が地蔵菩薩同様に錫杖を持物とし人間界に下りて衆生を救済して行脚するという性格を持つこと、『沙石集』や『雑談集』にも地蔵と観音を一体とする記載があることを指摘し、良藤説話がこのような地蔵観音一体としての信仰から発したものであったため、時代が下り地蔵信仰が盛んになるにつれて地蔵の靈験譚へと推移したことを説く。^(注六)

平安末期に入り、末法思想と浄土教信仰が人々の間に浸透したことを背景に盛んとなった地蔵菩薩信仰であるが、鎌倉時代以降、多くの宗派が誕生するなかで現世利益への期待も高まるなど信仰は多様化し、室町期には観音菩薩とともに一層身近な存在として貴賤を問わず信仰されていた。多くの石仏や地蔵絵が作られたのもこの時期のことであり、『大乘院寺社雑事記』や『実隆公記』には地蔵絵の製作についての記事が散見される。^(注九) また足利將軍家でも、地蔵と道祖神が習合した勝軍地蔵を軍神として信仰していたことが知られており、とくに初代將軍の足利尊氏は地蔵像凶画を日課とし、京都等持寺に一〇万体の地蔵像を建立したと

^(注九)いう。

『狐の草子』の救済者が地蔵菩薩であることについては、第二段の補注に示したように足利將軍家の暗喩とする説もあり、室町期における地蔵菩薩信仰・地蔵絵の流行がその背景となっているのである。

(藤田百合子)

(注一) 横山重・太田武夫編校『室町時代物語』第三(古典文庫、一九五七年) 解題

(注二) 内田啓一「早稲田大学図書館所蔵『狐草紙』と『文観阿舍利絵巻』—文観房弘真の後世におけるイメージ化—」(『早稲田大学図書館紀要』六二号、二〇一五年三月)

(注三) 宮次男「足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって」(『美術研究』二六〇号、一九六九年)

(注四) 日本風俗史学会編『日本風俗史事典』(弘文堂、一九七九年)

(注五) 渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『絵巻物による日本常民生活絵引』第四卷(平凡社、一九八四年)

(注六) 小松和彦「狐の「浄土」と異類婚姻譚」(『異界と日本人絵巻物の想像力』角川書店、二〇〇三年)

(注七) 大坪俊介「『狐の草子』と良藤説話—信仰の推移を巡って—」(『国文学試験』一七号、二〇〇七年三月)

(注八) 小松茂美「『地蔵菩薩靈験記』諸本の展開」(『山王靈験記 地蔵菩薩靈験記』続日本絵巻大成一二、中央公論社、一九八四年)

(注九) 辻善之助「足利尊氏の信仰」(『日本仏教史』四、中世篇之三、岩波書店、一九四九年)、上島有「足利尊氏文書の総合的研究」(国書刊行会、二〇〇一年)、黒田智「勝軍地蔵の誕生」(加須屋誠編『凶像解釈学—権力と他者』仏教美術論集四、竹林舎、二〇一三年)

二、解説

(一)『狐の草子』諸本と「女子大本」の特徴

『狐の草子』の現存諸本については、古典文庫『室町時代物語』第三の解題のほか、宮次男氏や大坪俊介氏、内田啓一氏により整理されている。以下、各氏の論考に基づき、女子大本と比較する上で重要と思われる書誌を簡潔に示す。

①個人蔵本（室町中期頃、原本か）

絵巻、一軸。縦一七・二糎、全長八二二・一糎。全七図。第一段の詞書欠落。紙注極書に「土佐光信朝臣筆」「住吉如慶・具慶父子の法印」あり。義尚の御物と考えられる。

②国立国会図書館蔵本（江戸前中期写か）

絵巻、一軸。縦一七糎。全七図。外題「喜津祢乃草子」。第一段の詞書欠落。奥書に「土佐光信朝臣筆」「住吉如慶・具慶父子の法印」（転写）あり。

③石川透氏蔵本（江戸前中期写）

絵巻、一軸。縦一六・四糎。全七図。外題なし。箱書に「狐草紙」と墨書。第一段の詞書欠落。

④宮内庁書陵部蔵本（江戸中後期写か）

絵巻、一軸。縦二七糎・全長八七〇糎。全七図。外題・内題「狐の草紙」。第一段の詞書欠落。奥書に「土佐光信朝臣筆」「住吉如慶・具慶父子の法印」（転写）と、「松岡清助辰方」の花押あり。

⑤西尾市岩瀬文庫蔵本（江戸後期写）

絵巻、一軸。縦一八・三糎、全長七四六・三糎。全七図。第一段の

詞書欠落。外題「狐草紙 全」。

⑥青山学院大学蔵本（江戸後期写）

絵巻、一軸。全七図。外題「きつねそふ幣」。第一段の詞書欠落。絵・詞書の双方に錯簡あり。

⑦大東急記念文庫蔵本（江戸時代写）

絵巻、一軸。縦二九・七糎、全長六九七・八糎。全七図。第一段の詞書欠落。外題・内題・奥書なし。料紙の上位に詞書を、下段に絵を配置する。

⑧早稲田大学図書館蔵本（江戸末期写）

絵巻、一軸。縦一五糎、全長五九〇糎。全七図。第一段の詞書欠落。外題「きつね草紙」。奥書により、狩野探幽による縮図を嘉永二年に淵澤守純が模写したものであることが知られている。

まず、『狐の草子』の原本かそれに極めて近い写本と目されているのが現存最古である①個人蔵本である。素朴でいて優美な画風は土佐光信の初期の画風と通っていることから、極書の通り光信本人により手掛けられたものであること、また、室町幕府の第九代將軍足利義尚の御物であった可能性の高いことが指摘されている。

この①個人蔵本に対し、②～⑥までの諸本は、詞書・絵ともに内容をほぼ同じくすることが指摘されている。なかでも②国立国会図書館蔵本と③石川透氏蔵本は、絵巻の形態の面でも①と同じ縦の長さが一七糎前後の小絵であり、より原本に近い距離を保っていると考えられる。

一方、⑦⑧の諸本には①個人蔵本との距離が認められる。例えば⑦大東急記念文庫蔵本の詞書には「ひた、れ」↓「すわう」、「されかうへ」↓「あわひのから」のごとき誤写の範疇を超えた異同が見られる。また⑧早稲田大学図書館蔵本に関しても、数カ所にわたる長文の脱文のほ

か、第五図に錫杖を持った二人の僧が書き足されているなどの違いがある。漢字仮名レベルでの異同が多いのも⑦⑧の特徴である。

ではこれら諸本に対し女子大本はどのように位置づけられるだろうか。

⑨ 日本女子大学日本文学科蔵本

絵巻、一軸。紙本淡彩色。縦二九糎、全長八九六・五糎。全七図。題簽に外題「きつねの双紙」。第一段・第二段の詞書欠落。第六段に独自本文の挿入あり。その他漢字仮名含む細かな異同が多々見受けられる。

まず絵巻のサイズは縦二九糎と大型であり、小絵という原型は残さない。詞書については、〈第六図〉を分断する形で長文の独自異文が挿入されているほか、細かな異文の挿入や校異、漢字仮名の異同が目立つ。この異文・校異には「しかしか」「やく(夜具)」など近世以降に類用される語が見られることから、時代が下ってから作られたものであることが推測される。また絵に関しては、全体的に自然描写や背景を簡易化・省略する傾向がみられる。建物の描かれ方も、直線的な諸本に対して目測で線を引いたかのような不安定さが目立ち、正統派の絵師によるものではない印象を受ける。一方で登場人物の衣の模様や調度品などは詳細に描かれるなど早稲田大学図書館蔵本にも共通する特徴も見受けられる。

以上、女子大本は詞書や挿絵の状態などから、原本を忠実に再現した初期の模本ではなく、異同や錯簡の見られる後期の模本との距離の近さがある。そのなかでも成立は遅く、江戸時代末期を遡らないとみても良いだろう。

(注一) 横山重・太田武夫『室町時代物語』第三(古典文庫、一九五七年)

(注二) 宮次男「足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって」(『美術研究』二六〇号、一九六九年)

(注三) 大坪俊介「『狐の草子』と良藤説話―信仰の推移を巡って―」(『国文学試験』一七号、二〇〇七年三月)

(注四) 内田啓一「早稲田大学図書館所蔵『狐草紙』と『文観阿舍利絵巻』―文観房弘真の後世におけるイメージ化―」(『早稲田大学図書館紀要』六二号、二〇一五年三月)

(渡邊咲子)

(二) 『狐の草子』の成立と享受

本絵巻の成立に関しては、『実隆公記』明応六年(一四九七)十月十五日条の記事に

中山中納言来談、滋野井絵二卷令見之、一卷狐絵繪巻、一卷八幡臨幸繪等也

とあり、この「狐絵」が『狐の草子』を示していると考えられることから、この絵を所持した常徳院、すなわち室町幕府の第九代將軍足利義尚が没する長享三年(一四八九)以前であったことが、宮次男氏により指摘されている。^(注一)更に宮氏は、この御物の「狐絵」を①個人蔵本「狐草子絵巻」と同定し、堂上公家や足利將軍家で低年齢層のお伽用として用いられた小絵という形態や土佐光信筆の他の絵巻の奥書との関連において、本絵巻が義尚十五、六歳のときに所持したものであり、文明十二年の成立であろうと推測している。

文明十二年(一四八〇)といえば、応仁元年(一四六七)から文明九年(一四七七)までの約一年間続いた応仁・文明の乱の傷跡も生々しい時期である。歴代絵巻制作に注力してきた足利將軍のなかでも義尚は

とりわけ熱烈な愛好家であったというが、その背景には、戦後の文化復興としての側面や、戦乱により失われた將軍家の權威の立て直しを図る文化的戦略があったことが指摘されている。^{(注1)(注2)} おそらくは『狐の草子』も、このような文化復興活動の一貫として將軍家の周辺で制作または書写され、義尚が所持していたのであろう。

『狐の草子』と足利將軍家の関係は、その内容面からもうかがえる。

第二段の補注において、本絵巻の僧都のモデルが後醍醐天皇に寵用された文観であったとする内田啓一氏の説を紹介したが、ここでは足利將軍家が信仰した地藏菩薩によって僧都が異界から現実世界へと引き戻されるまでの流れが、文観が足利尊氏によって南朝繁栄の夢を打ち砕かれたことの暗示になっていると指摘されている。『狐の草子』は、狐に騙された好色な愚僧の滑稽譚や、当時流行した地藏信仰を撰取した靈験譚のなかにも、政治的な要素を巧みに組み込んでいるのである。応仁・文明の乱から時を置かずして、当代きつての絵師・土佐光信の筆で『狐の草子』を制作させたのも、今一度室町幕府成立の時代を想起させ、地藏の靈験にあやかり足利將軍家の權威を回復させたいという願いのあらわれかも知れない。

しかし『狐の草子』から文観や足利尊氏のイメージが薄れていくにつれ、政治的な意味合いも後退し、狐に騙される愚僧という滑稽譚的要素が全面に強調され享受されていったのであろう。

(注一) 宮次男「足利義尚所持狐草紙絵巻をめぐって」(『美術研究』二二六〇号、一九六九年)

(注二) 高岸輝「足利義尚の絵巻狩り—応仁・文明の乱後の絵巻再生」(『室町

絵巻の魔力 再生と創造の中世』吉川弘文館、二〇〇八年)

(注三) 高岸輝「応仁・文明の乱後の文物復興と土佐派・狩野派」(『室町王権

と絵画—初期土佐派研究—』京都大学学術出版会、二〇〇四年)

(吉田怜世)

(三) 『狐の草子』における先行作品撰取

『狐の草子』に類似する説話として、『扶桑略記』巻二十二「善家秘記」や『今昔物語集』巻十六第十七話「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語」などにみられる賀陽良藤が狐に化かされる話が指摘されている。^(注1)

良藤説話の概要を以下に示す。

備中国賀陽良藤はある晩美しい女と出会う。その夜、良藤は女の邸で契りを交わし、子をもうける。その頃良藤の実家では帰ってこない彼を不審に思った家族が搜索をはじめだが、一向に見つからないのでせめて亡骸だけでも見つかるようにと十一面観音像を造る。一方、良藤が暮らす女の邸に杖をついた僧がやって来る。その姿を見た邸の人々は逃げ去る。その後、良藤は実家の蔵の下から憔悴した様子で這い出る。家族が蔵の下を見てみると、狐たちがさつと一斉に去っていった。良藤は狐に誑かされていたのだと考えた家族は陰陽師を呼び、お祓いしてもらった。良藤が過ごした十三年(『扶桑略記』では三年)間は、現実世界では十三日間の出来事だった。

狐に化かされた男を救済するのが観音が地藏か、化かされていた期間が十三日か七日かという違いはあるが、男が美しい女(狐の化身)と出会った女の邸でともに暮らしはじめる点、錫杖を持った僧が現れると邸の者々は逃げ散り、気づくと蔵や寺の床下である点、女と暮らした時間が実は短い間であった点など、話の筋道は大枠のところまで一致している。

こうしたことから『狐の草子』は異類婚姻譚や地藏の靈験譚・僧の滑稽としての方面から論じられることが多いが、僧都は狐に化かされてい

る間、無自覚ではあっても狐たちの作り上げた世界で暮らしていたのであり、この点において異界訪問譚的な性質を有する。本人の時間経過の認識と実際の時間経過の間にずれが生じていることも、異界訪問譚の常套である。ただし、異界訪問譚の多くが浦島太郎のごとく数日間と思われた間が実際には数百年間であったとされているのに対し、本絵巻では長い時間が実際には短い時間であったという。ここには、人間に比べ長い時を生きる神々の時間は遅く、狐や鼠のような寿命の短い動物たちの時間は早く流れると理解されていたことが指摘されているが、それとは別に、僧が現世に戻ってくる一連の場面からは、次に示す「邯鄲の夢」の故事も連想される。

趙の時代、盧生という若者が都の邯鄲に赴く道中で道士（『太平記』や謡曲〈邯鄲〉では宿屋の女将）と出逢い、夢が叶うという枕を授かる。その枕を使い眠ると、盧生はたちどころに出世し、紆余曲折を経ながらも最終的に国王となり、栄旺栄華を極めた一生を送った。そこで盧生はふと目を覚ます。彼が過ごした一生涯の歲月は、実際には粥が炊けるまで一瞬の出来事なのであった。

夢の結末は諸書により異なり、栄華のまま終わる場合もあれば、妻子が海に落ちて死んでしまう悲劇となる場合もあるが、夢の中で過ごした歲月が一瞬の出来事であったという展開はどれも一致している。なかでも『狐の草子』に近いものとして謡曲〈邯鄲〉に注目したい。^(注三)『狐の草子』では、錫杖を持った僧の到来により正体を暴かれた狐たちは「皆四方へ逃げ、影も形もなかりけり」と四散し、気づけば僧都は金剛勝院の大床の下だったとされているが、このくだりは『今昔物語集』では「皆逃去ヌ。俗杖ヲ以テ良藤ガ背ヲ突キテ、狭キ所ヨリ令出シム」と、狐が逃げた後、良藤が杖で小突かれて外に出され蔵の下から這い出してきたこ

とが具体的に描かれており、狐の世界から現実世界へと戻る場面の描写が異なっている。一方、〈邯鄲〉で盧生が夢から覚める場面の詞章は次の通りである。

……まことは夢のうちなれば、みな消え消えと、失せ果てて……百年の歓楽も、命終はれば夢ぞかし、五十の栄華こそ、身のためにはこれまでなり、栄華の望みも齢の長さも、五十年の歓楽も、王位に
なればこれまでなり、げになにごとも一炊の夢……^(注四)

盧生が王位について五十年が経った酒宴の席で舞童の舞に引かれて舞っているうちに、五十年の栄華が終わり、今までもともに舞っていたはずの舞童や臣下が「消え消え」に消え失せる。そこでふと目を覚ました盧生は、それが一炊の夢―粥が炊けるまでのほんの僅かな時間であったことを知るのである。この展開は、その瞬間までいたはずの女主人や侍女・侍がぱっと消え失せ、気づけば全く別の場所にいる、という『狐の草子』と極めて近い。もともと、「邯鄲の夢」とは異なり、『狐の草子』には教訓性はない。あくまで狐の世界から現実世界へ引き戻される手法として、謡曲〈邯鄲〉のごとき夢から覚める手法が取り入れられているとみるべきであろう。

第二段の私注でも狐の女主人からの手紙を運ぶ「ひてう」が謡曲（土蜘蛛）の「胡蝶」のごとき侍女の呼称である可能性について触れたが、本絵巻の先行作品撰取を考える際には、説話や歴史的事柄だけでなく、このような謡曲までもが視野に入ってくる。

（注二）内田啓一「早稲田大学図書館所蔵『狐草紙』と『文観阿舎利絵巻』―文観房弘真の後世におけるイメージ化―」（『早稲田大学図書館紀要』六二号、二〇一五年三月）、大坪俊介「『狐の草子』と良藤説話―信仰の推移を巡って―」（『国文学試論』一七号、二〇〇七年三月）などで

言及されている。

(注二) 小松和彦「狐の「浄土」と異類婚姻譚」(『異界と日本人 絵巻物の想像力』角川書店、二〇〇三年)

(注三) 謡曲(邯鄲)の初演は『歌舞髓脳記』の記録によると康正二年(一四五六)であり、『狐の草子』の成立期には既に演じられていたことがわかる。

(注四) 天野文雄ほか『元雅と禅竹 夢と死とエロス』(能を読む3、角川学芸出版、二〇一三年)

(四) 美福門院・『玉藻前』との関係

僧都がいた場所が「金剛勝院」であることに「狐—美福門院—金剛勝院」という連想が働いた可能性については既に述べた。ここでは美福門院・『玉藻前』という点から『狐の草子』について考察する。

美福門院(藤原得子)は永久五年(一一二七)、伊予守藤原長実と左大臣源俊房女の間に生まれた。とりわけ高い身分というわけではなかったが、鳥羽院から寵愛を受け、保延三年(一一三五)に暁子内親王(八条院)、保延五年(一一三九)には体仁親王(近衛天皇)を出産し、国母となる。近衛天皇の皇位継承者として、崇徳院の皇子・重仁親王を退け後白河院を支持したことが崇徳院の反感を招き、保元の乱の原因を作ったとされている。

先に述べた「金剛勝院」以外にも、『狐の草子』には美福門院を彷彿とさせる箇所が見える。まず第二段で女主人が僧都の迎えに寄越した、「八葉の車」であるが、これは『平治物語絵詞』において、美福門院が使用していた車として描かれるものである。また、第四段で歓待を

受けた僧都の「まことにしる所あまたあるにこそ」という推測には、美福門院が娘の八条院に広大な領地を相続させたことが想起される。同段で「御手水」や「供御」といった宮中を思わせる語が用いられていることも、女主人の邸が美福門院が所在した鳥羽院の仙洞を意識していることが読むことができる。

『狐の草子』と同様、美福門院との関連が指摘される物語に『玉藻前』がある。『玉藻前』は南北朝時代前期成立のお伽草子で、美貌と聡明さで鳥羽院を虜にした玉藻前が主人公である。玉藻前と契ったことで病にかかった鳥羽院は、三浦介・上総介ら有力武士に命じて彼女を討伐させる。玉藻前の死骸からは仏舍利・宝珠・針が出て、それらが三浦介・上総介と源頼朝に渡るといふ筋書きである。

古くは滝沢馬琴が「鳥羽院の美福門院を寵させ給ふのあまり……近衛院の宮嬪、玉藻前といふ妖怪を作り設けしなり」と述べているように、女性的な魅力で鳥羽院に近づいた玉藻前は、高くない身分から鳥羽院の寵愛を受けて国母となった美福門院と重なる。また、仏舍利を保持していたという点でも玉藻前と美福門院は類似する。仏舍利を体内に保持していた玉藻前に対して、『大乘院寺社雑事記』などによると、美福門院が仏舎利の相伝を得た記録がある。これらのことから、玉藻前の造形に美福門院の存在が影響しているとされる。

『玉藻前』の成立時期は『狐の草子』よりもやや遡るため、「狐—美福門院」という連想は既にできていたことがうかがえる。しかしながら、王朝を傾け国家転覆をも企んだ大悪狐の物語に対し、色香に迷った僧都が狐に騙され、這々の体で逃げ出す『狐の草子』のスケールはあまりにも小さい。従来のお伽草子からのずらしがこの物語の滑稽さを強めており、そこに『狐の草子』ならではの興趣がある。

(注二) 出自が最上級貴族ではなかったため、「諸大夫の女」と軽視されていた。例えば『台記』康治三年(一一四四)正月一日条には、皇后である美福門院に対し、藤原忠通は「諸大夫女」であるゆえをもって拝礼せず、そのことを藤原頼長が批判している記事がある。また、『今鏡』第三「をとこやま」には「いとやんことなき際にはあらねど」とある。

(山内益次郎『今鏡の周辺』和泉書院、一九九三年)

(注二) 国民図書株式会社編『曲亭馬琴集』下(近代日本文学大系16、国民図書株式会社、一九二七年)

(武居真穂)

(五) 女子大本の詞書と吉野山の解釈

女子大本に独自異文が多いことは、(一)女子大本の形態で述べた通りである。この異文には状況や理由の説明に筆を割く傾向が見られ、内容を把握したうえで転写の際に書き加えていると考えられる。なかでも長大なのが、『第六図』の間に挿入される形で存在する次の一文である。

僧都は、あまたの子どもにはやし立てられ、なほなほ心もとほとほと、踏む足元も見え分かず、ここかしこに行き、かかりければ、童はなほも喜び、手拍子打ちてはやしてけり。やうやうとして故郷の近所へ行き着けり。

これは僧都が多くの子どもたちに笑われながら帰郷する場面を説明するもので、この一文が加わることよって滑稽さが助長されている。祖本成立よりかなり時代が下った写本である女子大本では、政治的な含意が理解されなくなった結果、色好みの老僧が狐たちに騙される滑稽譚としての面が強調されるようになったのだらう。

そのような中で『狐の草子』はどのように読めるのか。老僧の和歌

「我がためにありけるものを吉野山人に知られぬ花の住み家は」の解釈を通して考えたい。

「これは秋の半ばなれば」とあるように、季節は秋に設定されている。だが僧都と女主人の贈答、とくに僧都から女主人に詠みかけた「我がために……」の歌は、明らかに吉野山と桜を結びつける和歌のイメージに基づいており、ずれが生じている。ではなぜ吉野山と桜なのか。私注にも挙げた通り、和歌における吉野は平安後期以降、桜と詠まれる例が多くなった。^(注三) このような歌枕・吉野のイメージの変化に西行の影響が大きいことは、諸先行研究の指摘するところで、久保田淳氏は、西行にとつて吉野が花と切り離せない場所であると同時に、「憂き世から身を隠すべき場所、隠棲する場所」と述べている。^(注三) だが『狐の草子』の僧都は女に誘われ色めいた気持ちでやってきたのであり、「吉野―桜―西行」「吉野―隠棲の地」のイメージが「とく寝ばや」という言葉で覆されてしまう転倒にこそ当該歌の面白味がある。

加えて吉野が持つ異界のイメージも看過しがたい。例えば『とりかへばや』において吉野は出家者の隠棲の地として描かれているほか、男女きょうだいの転換が行われる重要な地として機能しており、都から一線を画する空間として捉えられている。また、ここに隠棲する吉野宮は初対面で男装の女君の将来を予見したり髪を早く伸ばす秘薬を所持していたりと人間離れた力を持ち、唐への遊学経験もある。『浜松中納言物語』でも吉野の尼君は唐後の母という設定で唐との結びつきが認められる。これは、絵巻物などにおいて異界が唐国風に描かれることも無関係ではないだらう。吉野は日本であって日本ではない土地なのである。

このような吉野が季節外れの桜とともに詠み込まれることで、女主人の邸に四方四季で描かれることの多い異界のイメージまでもが重なって

くるのではないか。

(注一) 『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)「吉野」項参照。

(注二) 滝澤貞夫「西行の歌枕」(和歌文学会編『論集西行』笠間書院、一九九〇年)、白田昭吾「西行と吉野山」(『国文学解釈と鑑賞』六五号、二〇〇〇年三月)、山本啓介「西行と吉野山」(『国文学解釈と鑑賞』七六号、二〇一一年三月)など

(注三) 久保田淳「西行の世界」(『古典文学に見る吉野』和泉書院、一九九六年)

(大塚千聖)

石井倫子 (日本女子大学文学部教授)

伊達舞 (日本女子大学博士課程後期)

渡邊咲子 (日本女子大学博士課程前期)

吉田怜世 (日本女子大学博士課程前期)

大塚千聖 (日本女子大学博士課程前期)

武居真穂 (日本女子大学博士課程前期)

藤田百合子 (日本女子大学博士課程前期)

三上真由 (日本女子大学博士課程前期)